莊子繪鈔

亨

ロ 13
1898
2

1898
2

莊子繪抄卷の亨

菊丘臥山人江匡弼文坡拙解

内篇齊物論第二

齊物論とは。衆物の齊き事を論じ。明さむる事にて。齊と一なり。衆論を合て一と為るなり。世の人神仙の眞人の玄旨を悟らざれば。各々人我の間に。是非の爭ひをなす。是非邪正曲直に如るふ。是の如きの衆論を為す。眞人の玄旨を大悟する人は天地同根萬物一體なる事を明ひれども。眞人を大悟せざる輩は此理を明さざる故。莊子深く憐愍て。寓言譬喩を以て。是非邪正曲直千差萬別を轉ぜらるる妄意を除きて眞人の場に到得しむるの論なれば。齊物論と號られきり。此篇

の首篇に南郭子綦といへるに隱て坐し。顏成子游と。人籟地籟
天籟の。三籟を論ぜり。長文あり。繁きに省きて只危の一二に解を
莊子の白人々神明（神塊精神を神明とよむ）を苦勞して彼い善ぞや。是い惡ぞや。彼い邪ぞや
是い正しきのと。善ぞ惡ぞの一偏ふるひ。種々の偏見斷見を起し。万物
を是非して本來邪正一如。善惡不二なりて。邪といへども正と名付
ても。本來二なりて同き事に知らざるをこれを朝三といへり。何を
ぞ是に朝三といへるぞ。狙公といへる者ありて。芧に賦ふ曰。朝に三なりて暮
に四とせんといへば。衆狙皆怒る。曰然に朝に四なりて暮に三とせんといへば。衆狙ども皆
悅べりとこの譬い列子卷の一黃帝篇ふ悉く出ず。然し莊子の文を。
簡古なりて長じたり。列子い文繁くして。莊子ふ劣れども。匡衡初學乃

爲ふ列子の黃帝篇に和解して。右の朝三の事に悉く說む。列子ゟ曰。
宋ふ狙公といへる者あり。狙を愛し養ふて狙群あり。彼群狙ども。狙公の
意に能解す。狙公も又狙の心を知る。然るふ狙公貧乏ふなりて。つくりの
ふ。是衆狙ども多くの食ふ與へず。今より其食に限て與へんと。先狙ども。
誑きていへる。汝等い芧を與へ。朝ふ三與へて暮ふ四與へんといへば。衆狙
ども皆々怒起てさわぐ。爰ふ於て狙公思案して曰。然らば朝ふ四與へ暮ふ
に三與へんといへば。衆狙ども皆伏して喜ぶ。今莊子の朝三といへるも此意
と同じ。莊子この譬に說て後ふ曰。名實未ぶ虧ずして喜怒用て爲
を。示これふ因ひの。今この群の狙猿と同じ芧を與るの數の名に三と四とあり。
名に三と四といへども。實に芧只七つの。然もに四と三といへども。三と四といへども。

名の異なるのみにして實は七ツの芧なり。然るに朝三暮四とのべ狙ども怒腹を立又朝四暮三とのべんとのべば皆悦ぶ。狙のごとくなれども世の人も又是の如し。是に以て聖人世界の万物を和合し平等に爲るを以暫く是非を以てたとへ彼は善なり。是は悪なりと示し說て諸人の善悪不二なる事を悟らぬ者に暫く說示し。終に其眞一を悟らば此場に會得せん會得ぬ者は天均に休せん。是を之を兩行と謂なり。莊子譬言に以て。天地同根萬物一體なれども柳は緑なり。花は紅ひとし。各異に說て暫く悟ざる凡夫の意に慰め置なり。天均とは均く平なりて。彼と是と間なく槩して搔なしたるが如きに休せんとは彼眞一を悟らぬ凡夫どもが是非の爭ひをして彼猿どもが七ツの芧に四ツの三の三の四のとのべ變れば或は

怒つと又は喜ぶが如きも終に眞を大悟せば天均とて善悪邪正の間なく天均とは事に知て始終て其所に休息と旅人の家に歸て休が如くなれば是を兩行とは是非善悪二ツ共に行ふとのべり

右の神明を勞して爲るは朝三の譬に引て莊子の示さる事は善悪邪正彼是と或ひは悪又は善て聖人も善人を賞し悪人を戒めなれども聖人の聖慮は彼愚蒙の人を教る事は彼狙公が群猿に芧に與ゆるが如しと莊子の裏に說て表に明を手段なり。儒者此一段が解を見て嘔吐して罵詈むべれども夫して是を會得をべし

昔者莊周夢に胡蝶となりて華園に翅を翻々然と飛下つ

飛揚して快く樂を自喩して花に止まり香を追て志に適ふの樂を盡して我が莊子なる事を知らず然に俄然に夢覺なるべし。蘧々然と牀の上に打僵て手足を伸べ欠伸して能形と顧れば莊子なり。知らず莊周が夢に胡蝶に爲るか又胡蝶が夢に莊子と爲るか。莊周と胡蝶とは必ず分わかん此これを物化と云ふ

右莊子の胡蝶の夢は此齊物論の終に千要の結束なれば。莊周自己の身分の夢は説て我昔夢に胡蝶と爲りて。百華爛熳と紅白色香を爭ふ園の中に翩々と翅を述て飛なるを忽に覺て見れば有はる花園もなく我が大牀に欠伸し手足を蹈舒て臥るのみ此所に於て蝶が莊子となるの思案工夫一見さば我莊子と蝶とに於て必ず分別の處わるべきぞと。説て説破らず禪家の古則の如く似て諸人の胡蝶の夢に説を工夫し。參究せば必ず此大夢の覺場所わかんと莊子の老婆心なり。此これを物化と云ふと夢と。覺との二を一とするの義なりと或は萬物變化の理を云ふのと諸説さまざまなれども皆中に惟眞を大悟の人は此義を解るべし。各々眞を工夫し。參究して見よ此齊物論の篇中に莊子種々の譬喩寓言を多く説れども皆略して惟其要を載るのみ易經に曰神は恍惚に潛て日用に見ずとも知識を以てとはらず是に由て悟るべし萬物も一形なり萬形も一化なり萬化も

神あり。神あり。て是を明ふ〜變じて是ふ通ど。孰ら物と爲し孰ら
我と爲む。此地ふ到て大齊とゝと。物化の義工夫をべし

内篇養生主第三

養生主とゝ生を貪つ。身ゝ養ふ事に非ど。此篇ふて養ふと說ゝ人々
の本來の面目坊一心を養ふ義ふて。禪家ふてゝ本來の面目とゝひ。莊子ふ
真君と是をゝひ。仙家ふてゝ真一と是を說。釋氏ゝ是ゝ佛性とも。真如と
もゝ。人々の形體の中ふ坐を且那殿ゝり。此且那殿を養ふ事ゝ能をれ
ゝ形體ゝ自然と達者ふゝるゝり。其且那どゝ養ゝとゝゝ欲をくゝ。
虛無恬淡として。一心を靜て物と爭ひ。物ふ逆ふ事をく。方事自然ふ
任せて。一心を全ふとる事ゝり。其全ふ養ふ道を。二次ふ記を。吾生ハ涯

わるを而して知ることゝ涯ゝ〜涯わるゝゝゝて涯ゝることに隨ふ殆已已ゝて知と
爲ゝ殆ふきのと

莊子右の語を以て養生主の篇の首ふ說るゝ深い哉莊子乃心
右の意ゝ五吾生とゝふゝ吾ゝ莊子ゝゝゝの事ゝゝふ似られども是
ハ諸人の上ふゝるとて各々も吾もとゝゝ義ゝり其各々も我も一生
とゝふゝ纔ふ五十年ゝ七十年或ゝ百年の壽命ゝゝ保者ゝ世ふ希
なるゝ皆壽命の涯わる各々や我ゝるふ凡心の淺智惠ふて是
を欲ひ彼を欲ゝて古歌のごゝく思ふと一りゝ二ゝ三四五
六〜の世やゝる世の中に金銀ゝけるゝ金銀を積〜欲ひ金
銀ふ富れゝ家屋鋪田畠山林を求ゝ〜欲ひ器財を求ゝ衣

裳ハ求メ男女ハ欲ひ子孫を欲ひ官位ハ欲ひ高禄を欲ひ是ハ出来れハ彼ハ〻〻色々を種かゝるとて無量無數ハ朝ハ思ひ暮ハ想ふて涯ある壽命ハ有りて涯なき欲に隨ふハ扨も愚なる事ハて良慎ひべき事かな此の如く涯なき慾心ハ隨ふハ盲者ハ河涯へ進行ハ〻〻深き水底へ歸むハ如く殆ふく危ふきの〻殆ふきとの〻知はるも猶慾をかゝしいまゝに爲をいよ〻殆ふきとふ義なり是を能考へて無欲ハして天地自然の道理ハ順ひ放逸無慚なる欲心ハ禁め種々の願ひ望ハ止れハ本心安然として清淨無爲なる清淨無爲なれハ眞心安樂ハ眞心安樂なハ眞心の

壽命長久なり此眞心とふハ各々の形體の主人公なり此眞心主人公ハ息災延命なハ自然と家屋の形體ハ堅固なるべしとふハ義なり然れども万事の務ハ止て食と貪樂とを捨て夫に

老子

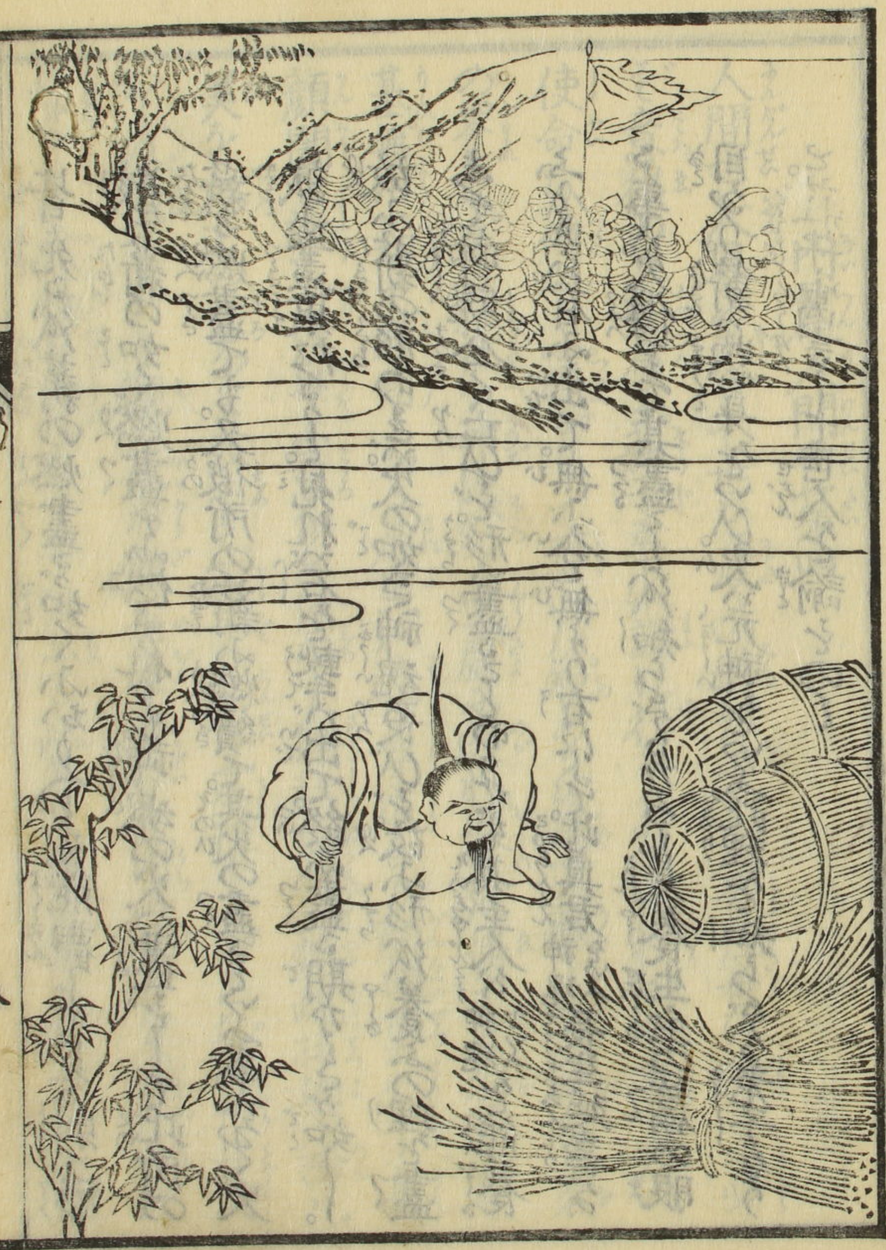
老子ハ道德經を說きたる老子ハ姓ハ李名ハ耳字ハ伯陽と云て世の人なるまれて此老子と仙人の祖師となりて仙人の祖師ハ天竺漢土ハ勿ハ上古なるなり

この老子死なれる時親友の秦失とふ人このよしハ聞て吊ひハ行きしに門口ハて號泣ていハ三度し直ハ門より我家へ歸るにより附隨ふ門人どもハ怪て老子ハ師の親き友達でいでゝぬと問けるに秦失こたへて曰ハ親き友なるとハそれなるに門人どもハ曰ハ然ハ是まで熊々思ひて來りて内へも入らと死骸も見ず只門口ハて泣く事三度し。

真人歸たまふべきまり疎略なるふ非ざる秦失が曰るるれど然して其方達が不審尤もなるを何をか隱さん此秦失いわの死したる老子と見識高き人なりとおりひしが今彼が見識なること事に知る夫れ何を以て見識なるを知るれば尚ふ前ふ吾老子の内ふ入て弔ひを說んと欲ひ内を見れば老者が哭泣を見れば其子に死なるして哭ぐ如くふ少者ら哭を見ざれば其母を死なるして哭ぐ如くふ愁傷と是を以て老子が平常に察するに生と死とは元より假名なる事に悟らざれば已が形迹を離去こと得ざるふ依て彼門人どもが生を慕ひ死を悲て愛ふ會集て自然とおく哭泣なり是生と死の始なる事に悟ぬ者なり是天理を遁れ外ふ實理ふ違背くの滯者なり古者これを遁天の刑と

いふ是天の理ふ遁ふ背く罪を得る者なるべ此のごとくなり適來と思ひ寄ざ此世ふ生まれ來る老子に限らず世の人の時節到來とふ者なり適去と忽ふ死去ふ順なり時ふ安ずして順ふ處とする哀樂なる其心を動かすこと能はざる古ふ是なる帝の縣解とふ帝の縣解といふ意ふ天帝の皆爲所ふて生るも死なるも自然ふ此の如きなり天帝も我々に奈何ともなる事なきやうなる壁言ば蚊蜻蛉が蛛の網ふ懸かるが如きに縣とふ其網を自然と脫ぎ去るが解とふ者ふ脫れ去るふ於て蛛も爲方なきが如し是を縣解とふなり窮こと知らざる薪るふ指を火傳ふて其盡こと知らず

右の窮こと薪るふ指をとふ是死生の喩なり世の人



皆死る以。薪の燃盡るが如くふちりへども。能觀ずて見る則い形散い薪の如く。燃盡るふ似るれども。神魂の火い盡ずして此所の薪ゝ燃盡ても。又彼所の薪ゝ燃續て其火の盡ることゝ事いなく。火誠ふ盡果たるゝと見れど石を擊ず出て。終ふ盡る期なきが如し。故ふ薪の形ゝ盡ても。火の如き神魂喪ひず。故ふ形以養ふの理を盡て神魂全く亡ひず。形ゝ盡ることありても。其主人公神魂をいふを能養ふことゝ有ふ出て。無ふ盡て無り有にて此眞君神魂を以長生延壽の事ゝ以傳て其盡ること知らざるなる。是養生主の篇の眼目なり。薪ゝ惣身をいひ火ゝ元神をいふ此理を知らざる老子なり。莊子寓言にて世人を諭すの

内篇人間世第四

人間世ゝ人界ふ交りて世を渡るの道以示を。人皆浮世以渡るふ必ず意得あり。此篇ふ莊子事以設け行ることあるふ行ざるが可とのひ。使命以傳ることふ傳ずして可とのひ。智ある以愚ふ藏し才の美なる名の譽ある名以杜声を却け心を空虛ふ逃れ譽以得ざるゝ咎なき基無用ゝ却て有用とある。是世以渡る要道なり。顏回葉公子高。顏闔を設て亡以爭ふ意なき以示し。櫟社商丘支離疏接輿が論ゝ。美を炫るの意なき以示を。莊子ゝ亂世ふ生れし人なれど世の中ゝ匡べつゝ爲べきと觀て外形散ゝ世塵ふ交りて内ふ臭るの眞道に離るして外物自ふ化る事以示を。此篇の首卷ふ顏回孔子ゝ見

衛國行むこと孤説なり。山木。膏火桂漆の患ひある故以て卷尾とする也。仲尼孔子の事なりの曰。天下の大戒とふたつの二あり。其一は命なり。其一は義なり。子の親孤愛とする命なり。心の解べからざる。臣の君の事なり。義なり。適として君の非なる事なし。天地の間の逃る所なし。是こそを大戒とふ

右。仲尼孔子聖人の曰。天下の大戒二ありとふたつ。是れを大戒とふなりで。實の孔子の此のせらきこと語の非ざ。是のこるべし。

次の文でも。皆莊子の語ふて孔子のかせられるやうに寓言せしなり。是を以て考へ見べし。世の莊子の書を讀て見る愚蒙の輩は莊子とふは。惟大言を吐て。五常を離れ虛無なる事を説

て聖人の教を誹謗。世間の法を蔑如し。迂闊なる事の孤説し。書なりと欲べし。然らば莊子も世界の人間世の道理を示さふ。天下の大戒二あり。大戒とは大法をふ。其大法は命と人々天より受るの一理をふて子は親の事るに孝を第一として心の解るなり。君の仕る臣は義を第一として何所の行ふとても天子国王の地のうげるふ事かはるべ。日も半時も。忠義を忘べからず。此二つの孝と忠義は天地の間の生る人々逃べ事のかはぬ大法なりと示されしなり。

此次の文も。ここでく忠孝を説なり。今これを略して結末を次の載る支離疏とふ者あり。此人は頤の齊を齊と臍の隱し。肩は項より高く。會板は髮の曲なり天を指て五管五管は五臟なり上の兩髀を脇と爲とやうの不

具なる支離疏なれば腰ぐゝて頭が下りて頤ふて臍を隱し兩の肩ハ柱て立てるごとく頭の上ると高く會撮ゆてる髮の髷ハ頭が下なれば髷ハ天を指ごとく五臟の腧ハ頭低なるが故ハ皆上ふわり兩の髀ハ脅と並られハ髀と脇と最ちぐゝ如く誠ふ此人ハ歩行るゞ大地をねゞ立るゝ落てる物を拾ふべき姿ふて渡世ふハ挫縅して仕立物を爲し治繕して洗濯物ハ爲して日を餬ひ箕を以て米ハ簸て其麁を播去て精米ハ得ハ以て千合を食ふて足り時ふ国守他國ハ軍ハ出さんとて國中の者を軍役ふ召て事わり此軍役ふ行ハ命りの役なれば誰も皆行てハ悲ミ愁ひ泣くと雖ども君命なれハ父母妻子ふ別を行て此支離疏ハ不具不仁なれハ此軍役を脫れ髀打振て歡ひ樂ミ又大役を餘人ハ仰付られて時も常疾わるハ以て其大役を脫れて時ふ国守ハ國中ハ於て病者ふて貧困難義なる者ハ救ひのて粟を玄米病人ハ與ふ賜ふ時ハ此支離疏ハ病人なりとて粟三鍾と一鍾とハ六石四斗但一升ちぐふ也十束の薪を賜ふ是支離疏が不仁なるハ以て軍役を脫れて命ハ全ハ一しそれのこゝ〳〵ハ玄米と薪とハ〳〵ると依てなり入るべし夫その形を支離支離とハ頭さゝり腰と膝との腰ハ屈ると者さへ猶以て其身ハ養て其天年を終るふ足て又況や其德を支離なる者をや

右の支離疏とハ者ハ支離とハ腰膝ぐゝ頭さゝりたる老人の如き姿の病者をハ疏とハ此病人の名ふ似られども是ふき者ふて莊子の寓言なり此文の意ハ世の人皆我戈智藝能を以て我こそ天

下に雙びなき達人なりと自慢すれども其才智藝能に依て終ふに難義困窮を藝に身を助るなどの難義なる此句の如き者皆世ふ多し或才智藝能ふて命に果を類多し然るに此支離疏を以て無藝無才智の人ふ譬てゆる世ふ用ゐ者ふやうに難に脫れ命に全ふし又德ある事あり世の人も是を以て考へ見よ無藝無才智の人ふ才智ある者を必とつふふ然れども支離疏ふ形不具ふして世に安く渡るにあらずや其我道德に不具ふして居る人ふ何と至まるふ非ずや

內篇德充符第五

德充符とは德ふ得る禮記の樂記の篇ふ德ふ得るとあり何をとうるとふ事なれども各々の本然の理を自己胸間ふ平生增減なく有得る得る事なり是德なり是神仙ふ眞なり此眞一なり此眞一內ふ充滿る充充とふ符とは符節の事なり內ふ眞一充滿れば外の萬境萬物ふ自然と妙應無礙ふして行住坐臥ふ爲ても皆眞一の理ふ背ず節符を合るが如し然まども眞一を大悟せぬ凡夫ふ此事ふ知らず惟外貌さへ好れば其德ある無きに依らず尊ひ信ず俗ふ是を襟ふ待て是なり故ふ莊子是をうるーーて殊ふ殘る形厲の貌の人を擧て安ふやうにして其德ふ中ふ充充るとふ充千要と說て今其一二を以て和解し初學ふ示をとて充のごとし莊子平生の獨言ふ曰我人の形ありて人の情なし人の形あるが故ふ諸人と同じく群つて交る然れども我元來人の情なれば故ふ一切の是非を身ふ得ず受ざるなり

眇乎として小き哉人に屬して居る境界は誠に天地の廣漠なる間に繞
る此五尺の形體を置て滄海の中に粟一粒を置に似たり然るに我
是の如きの小き五尺の形體にて諸人と共に群して居れども其我胸中に警
乎として大なる哉天地に混同めて一口に呑却し群類を超出して是
非の外に遊び獨その大を成とする者あり莊子と
平生交を遊びぬる友なりし故莊子が是の如く獨言をいふを聞て莊子
にいふ人故情なきに人とのべきやと莊子が曰如何に情の無きやと
人と稱するなりと惠子が曰人と生まれて情なくんば何を以てこれを
人といん莊子の曰道これに與へ天これに形に與へ惠しぞこれを人
と謂ざるを得しと惠子が曰既にこれを人とのべ惠しぞ情なきを

得む情なかるべからざるなり莊子が曰我情なしとのべ汝が所乃
情にあらざる我が所の情なしとのべ人の好惡を以て内其身を傷らど
常に自然に因て生を益なるを以て惠子が曰其方が今我に答る所
の常に自然に因任せて生を益さるを情なしとのべ義なりとのべ我不審
あり人なこの生涯を保益せざんば何を以て此肉身を有て世に長生せん
やと莊子重て答て曰道これに貌を與へ天これに形に與へ好惡を以て
内其身を傷ることなし今子惠子が神を外に子が精を勞を樹に
倚て吟じ槁梧に據て瞑る天子が形を選く子は堅白を以て鳴なり
右莊子と惠子との問答は莊子常に獨言にて事に惠子が聞
答て此問答を爲て林希逸の口義に註せり然るに朱得

之が通義ふ。右の問答以て前段の文と連て註を其是非ハ今爰ふ論ぜず。林希逸ゝ註ふ暫く隨ふて解を。凡此德充符の篇ふ。魯ふ兀者王駘ふ者あり。仲尼孔子と相若ふ。ふ。其餘ふ面白き事ども。數多說ども。長文ゆ皆是を省て。末の此問答を載るなり。此問答の文を大略說解くふ。右まづ惠子ハ博學多才にして外境ふ走。苦勞し。自己の精神を煩勞とゞゆ。ふ。莊子是ふ說示とふ。清淨無爲の要以て。自然の大道眞一の旨以悟ちん と欲と。故ふ種々論辨して曰。道これふ貌を與。天ときに形を與るに。其自然の大道や。天地の自然ふ順ふ事以。欲ハど。是非善惡の妄念慮を起して。汝ゞ精神以外の者以知くふして。苦勞とゞ故ふ或ハ樹以身以倚て吟嘯ふ。坐して槁梧の几案ふ據て瞑ふ。汝知らどや。天ふ子ゞ自然の形以授ふ。汝ハ堅白の花りて實なれ辨を鳴して自ふ苦しむなりと以て

内篇太宗師第六

此篇ふ。上の五篇の第一ふ。逍遥遊を說ふ。第二ふ。物と我と。是と非と以齊同くとる事を說。第三ふ。人々の主人公以喪失ざる事以告。第四ふ。人界以交ゆ。凡聖の隔なき以示し。第五ふ。人々本來の道德ハ。胸中ふ闕る事なく。充滿ゝ。千端万變ふ觸ても。符節以合とるゞ如きとの事を說て。扨この太宗師ふ。神仙家ふ於て說示し。教て。大悟ちひ。眞一の靈旨以曉さとひるなり。眞一とハ人々の本來の面目以ハ。太宗師とハ。道と

いつあり。道は自然ふ法る。自然とは心の外ふ求むる事なき。本來の大道なり。此篇ふは眞人の境界ふ說示し。眞一の要を曉して曰其一も侗と一なり。其不一も一なりと。此一は即太宗師を指ていふなり

莊子ゟ曰夫道は情あり信あり。此次の注ぎは次ふくく記を次を見べし

夫道とは此道は此大宗師なり。この大宗師ゟ本來の大道なりと。此篇ふて始めて說出されたる。此篇の眼目ふて此道は天地いまだ開ざる先より。今日の只今に至て。不生不滅の大道をいふなり。是即人々固有ところの眞一の本體ふて。釋氏は是を佛心とも眞如とも。本來の面目とも。或は種々に名號を設け說ども。皆是この眞一の事なり。老子ふ天一を以て清く地は一を得て寧とは。是なり。儒家ふ天の

命をる是を性といふこの性とは眞一なり。今この太宗師の篇に夫道とは。說の道ノ意はなり。是の如き道とは會得く。

次下の文を見べし。深き義は人々に夫一大悟して識へきなり

夫道は情あり。信あり。爲こと無く。形なし。傳こと可して受べからず。得へし

て見へからず。本ゟ自根ゟ有すべ未だ天地有ぬ古ゟ以て固存を鬼を神ふ。帝ゟ神ふを。天を生じ地を生じ。大極の先ふ在ても。而も高しと爲ど。六極の下ふ在ても。深しと爲ど。天地ふ先つて生じたりとも。久しと爲ど。上古ゟ。長じたりとも。而も老ずと爲ど

右言ては。此大道とは者は人々具足箇々圓成ふて本體乃靜なるゟ。發動く所發動の用の復歸をる所情あり信あり

て其本體眞一といふ所ハ無爲無形ふして恬淡寂寞ふ是を視れども見へず然れども師ふ從ひ參禪するが如く此眞一の大道を如何如何と日夜工夫して親切なるに忽然と此眞一の大道を大悟べし然るに禪家にいふが如く以心傳心の場あるべ傳ふ可して然も是を器物を授ふ如く是をと受取べき物ふく惟人々の發明するのみ故ふ受べくもとふ又大悟とる事ハ得べくして眞一といふ本體ハ無爲無形なるに眼を以て見るべからず此眞一といふ大道の根本ハ天地といふ物あるべき古より固存て鬼神も此眞一を以て有ハ無ふし無を有ふ變化をするの神異靈妙の信を以て上帝の万物を管領も天地の開闢ける上下わるも皆この眞一ふ依る事

かく此大道にあるべき事なり是の如き神妙不思議の大道眞一天地のあるべき大極無極の先なるを在ても高遠しとも爲ず又六極の天地四方の下に在ても深遠とせず天地ふ先つて生ても我ハ久しき壽命とるかなど上古よりも森羅萬象の中に長ずるとも老ずと爲ずとなり是その道の万物ふ徧滿する事の莫大なる事ハ說なり此道といふ篇の名の太宗師なり太宗師といふ即この道なり又眞一といふのなり古今の人この眞一を大悟得て種々の妙用を爲を故ふ次の文ごとく其妙用を得る事と眞一を大悟得る義をのべ稀聲氏といふ上古文字も無き時の帝王なり此帝王ハ眞一の大道を得て以て天地ハ契伏犧といふ帝王ハ此眞一を悟得て以て氣母ハ龍を氣母と

八元混沌の氣に萬物の母なりとて事なく人々を始め萬物に具せる元氣を襲て合せなり。維斗に眞を得て終古に式ど此維斗とて北斗星にて終古に天に在りて四季十二月に建し周るも眞の道を得て式ど周まるなり。日月に此眞を得て終古に周て息ど堪坏とて人に此眞に悟得て以て崑崙山に入て神となり。馮夷とて人に眞を得て以て大川に遊び水神となり。肩吾とて神に此眞を得て以て太山に處て黄帝に眞を悟得て以て雲天に登て神仙となり。顓頊とて帝に眞を悟得て以て玄宮に處て天下に治め禹強とて黄帝の孫なれど帝位に登らず眞を得て以て北極に立て水神となる。字に玄冥とて西王母に眞を得て以て少廣とて仙宮に坐す此西王母この眞の妙道を得て其生れし始めに知らず。其終を知る者なく常に十六七の好女子の如くにして仙女となれり彭祖に眞を得て上古に有虞舜王の世より下五伯にて殷の代周の世に至るまで壽命に保ち傳説に眞を得て以て武丁高宗となる帝に補佐し。奄に天下に有しめ東維に乘て箕尾に騎て而して列星に比を

右の稀聲氏より傳説まで此大道を得て以て是の如く種々妙用を爲ることなり。豈是等の人々に限らず眞を大悟せば即今の我々にても神通妙用大自在を得む。匡弼莊子の本文に直に眞人の二字を入加て其莊子に夫道とて道の心を説りのみ又北太宗師の右の文の前に曰何を眞人とて古の眞人に寡に逆ども成に雄ど士を士六事の字と同じ謀らど。謀と計と同じ然の若きに。中畧水に入ても濡ども火に

入ても熟とせざど。是知の能道ふ登假ること。然の若しと。云云猶
次の文ふ古の眞人ハ其寢ても夢みと其覺ても憂ふしとハひ又
云古の眞人ハ生ハ說ぶこと知らど。死を惡むこと知らど。
云云かやうに眞人の事、ハ猶多く說畢て。後ふ曰故ふ其これを好む
するふ一ふり。其これを好むせ弗も一ふり。其ハも一ふり。其不一ハ人と徒ふり。天と人と相勝ざる。
なると。其一と天と徒ふり。其不一ハ人と徒ふり。天と人と相勝ざる。
是これを眞人とハと。林希逸ガ曰ハ自然ふり。造化ふりと是
自然とハ彫琢の私意を雜ぜる。天然本原の所を一とハとふり。
此一を莊子說ふ所を工夫し。會得し見ベし。是眞一の旨と
略說て此眞一の場所を得ふる者ガ。即眞人仙人ふりと示さる

るふり。林希逸ガ曰これ釋氏のいゆる有無ともに遣とハと同じ
と。又老子のいゆる兩の者皆これを。玄ふ歸をとハふ同し。故ふ
天と人と相勝ざる。是これを眞人とハと。莊子ハ說ふ。一と不一と。皆
一ふりと說所を工夫をベし。又其一と天と徒爲りとハ所この一を
かハち眞一ふして。天理ふるハ。佛心又ハ本來の面目ガとハと。徒
なると。徒ハ徒黨ガど俗ふハぶ如く。儒の敎の性天理ふと。佛敎の
本覺眞如佛心本來の面目と徒ふり。同きふり。故ふ其不一ハ凡
人と徒ふりとハふり。然れども本來大悟して看れハ其眞一とハも
一なると。不一とハふも眞一ふり。今此篇ふ一と說ガ即此篇の名と
する大宗師ふて本來の大道を呼で一とハひ又ハ大宗師とも。異名

をはけまると知りて眞を曉悟せん事以宗とするなり

内篇應帝王第七

莊子神仙の至教の要と爲て眞一の旨以說示を事前の大宗師の篇にて底を叩て說盡せる也今此篇の應帝王と題して大宗師の次に又說示を事に古より神聖眞人なる者皆天下の事以外にして身以成就をるべきなり故に凡天下以治る帝王の道眞實に此の如くなるべきなり外に非ざるべき事以說示をば故に應帝王と名づけ又帝王に應ずる當るの義を以て也然し此帝王に南面して禮樂刑政を設ふけ紀綱法度を立て天下の民を治むるに非ざる斗衡に爭ひの端符璽に亂の首めありと唯清淨無爲にして能眞一の靈旨に契ひ万民をして無何有の鄉に遊

ざるの世以治むるに無心にして誠に帝王の道にかくの如くなるべき事を示すなり

此篇に見る齧缺王倪に問四たび問ども四たび知らずと云と說き始めて次々に於て種々の面白き說て聖人の治世と明王の世以治むることを多くわきまども皆略して末の文に南海の帝と北海の帝と中央の帝と相會して以舉て爰に和解と尤もこの所應帝王篇の決段のこれ内篇皆の總括の決段なる南海北海中央の帝と以例の寓言なりと知るべきなり

南海の帝以儵と爲し北海の帝以忽と中央の帝以渾沌と儵と忽と或時に相與に混沌の帝の領分の地に來て共に相見や中央の帝混沌これ

を待ひ。饗食應ふ。種々の珍物佳肴以て。もてる事甚だ善。に於て南海の帝儵と北海の帝忽と。混沌が饗食應の德を報ひ謝せんと謀て共ふ相談して曰人皆七竅ありて以て視聽食息。こと以爲を此混沌どのふ眼も鼻も口も耳もなく。七の竅のなき。誠ふ混沌どのなを定て不自由ふわるべし。此度我々が饗應御馳走めされ。其礼ふ此混沌どのふ眼鼻口耳の七の竅を鑿ておませひとて日々ふ一の竅以鑿て遂ふ七竅を七日ふ鑿あけられ氣毒や彼混沌どのいとろりと死きてゝり

右の儵と忽とが混沌ふ七竅以鑿と。皆譬とをりと會得べし。先この混沌と。人々具足をる所の真性眞一本來の面目坊をいるり。又儵と忽と。人々の妄想分別ゆり。右の混沌。眞一清淨無爲ふして儒教ふ

て。赤子の心とも仁とも性とも名づけ佛法ふて。佛心とも眞如とも佛性とも称して本來として動揺ふく有無淨穢長短取捨ふ屬せぬ體おのづゝ號きかを強て佛心の面目の仁の性の眞一のと三教ごとくと是以號假ふ呼ゆり。然ふ人々この清淨無爲眞一の。神體を具足をるゆゑ。種々に迷ひを生し。妄想分別以て此眞一の性以。穿鑿。此眞一の性ふ遠ざり。遂ふ迷ひふ迷ひて重ねて大悟を得ることゆき以。莊子。たとへて。混沌死をとゝゆゑり。林希逸を始め此莊子ふ註せし。人々ハ此混沌を一元自然の氣と註し。聰明ハ能身の累とる事以て。故ふ此の如く形容をとゝえり。誠ふ人々の眞性ハ混沌の如く。無我無欲無念無想ゆるに儵忽の妄想煩惱意識が種々

に穿ち。鑿て七情をたくさゝして。遂ふ身の害ゑ爲とゝれゝ此段を能々工夫〳〵て。清淨無爲眞一ふ七の竅の開ぬ樣ふをべ〻然も是の如くゝありと雖とも。本來の眞一ハ儻忽ハ勿論。金剛神ゝ出現〳〵て。穿鑿こと八萬刧を經るとも。一の竅も開きぐきい此眞一の混沌ゝ

とゝ〻ども。莊子たゞ〻く此を辟言て是ゝ〻ゝ

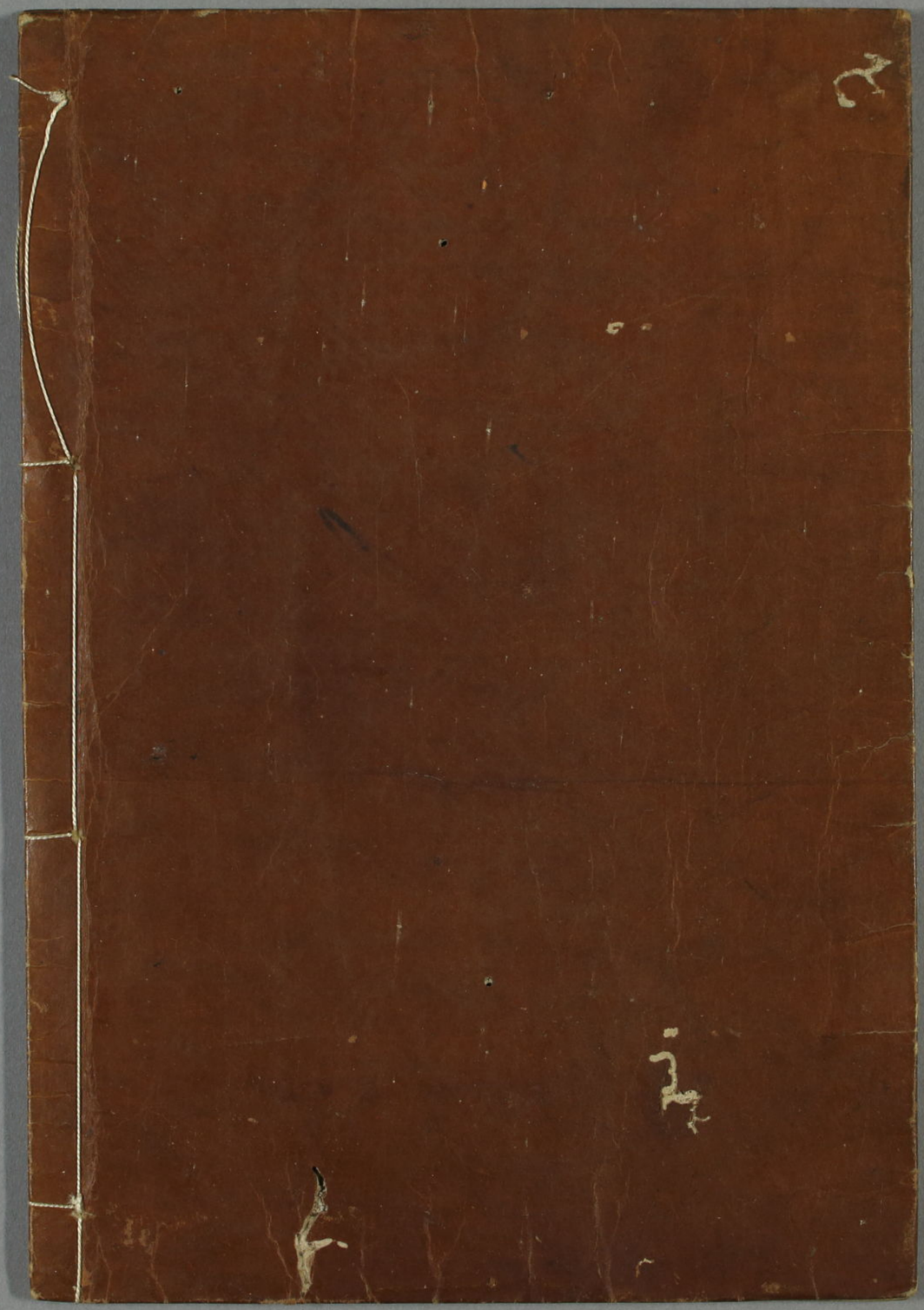
外篇駢拇第八

駢拇とハ。郭象ゝ注ふ。駢ハ合ゝ。大ゝ。足の大拇指の第二の指と。相連を合ふて一指と爲ふ。駢拇とハ。此外篇。駢拇第八の首ふ曰駢拇枝指ハ。性ゝを出ふ哉而〳〵て德ふ侈〳〵とゝある ゝ以て。題号と爲ゝ。例せゝ。論語の學而。爲政。又ハ公冶長。衛靈公と。稱ゝるふ同〳〵。右駢拇枝指とゝ。枝指

とハ手の大拇指の傍に枝て一指を生〳〵て六指とゝ。ゝ〻ゝ此駢と。枝の二指を。並ふ。自然の性命を稟て。生分の中ふ。これ有ゝ〻ゝ德に侈〳〵とハ侈ハ多〳〵ゝ。德とハ。仁義禮智信の五德を〻。扨此篇ハ。駢拇とて。足の五の指ゝ合〳〵て四指とゝ。又枝指ゝ。ゝ者と。ゝ〻。爰ふ出〳〵て其ふ依て。短者ハ短法身。長者ハ長法身ふて。自然天性を安ゝ。ゝ事ゝ。ゝ。

莊子曰長ゝ。ゝ者ハ餘ゝ。ゝと爲ゝ。短ゝ。ゝ者ハ足ゝと爲ゝ。是故ふ鳧の脛ハ短〳〵と雖ゝ。續ゝ。憂ひん。鶴の脛ハ長〳〵と雖ゝ。續ゝ。斷ハ悲ゝん。故ふ性の長ゝ。斷所ふ。ゝ。性の短きも續所ふ。憂ひの去ゝ所ふ〳〵

此篇長文ふ〳〵て。始終駢拇枝指を主意と〳〵て其自然ふ任せ

どして種々の是非を生じ清淨無爲眞一を失ふ事以諭
し示す夫長どる者は餘つを有とせどとは是世の人の身分又は
意に於ても何ふにけくも有ることふて譬ば金持が金に貪つと
高貴なる人が昇進知行を願ふ如きも長者富に飽どの譬の
如し然れども此事以古人が註し置る長どる者とは昔の孔子の弟
子に曾參字は子輿といふ者と史鰌字は子魚といふ者二人は性仁と
孝とに長どる者なり又離婁といふ人は兩眼明らかにして百里さきに
蚤が相撲取ている事でも何でも見分る程の眼力なり又師曠といふ
人は晉の樂人なり是は耳の聰人にて千里さきで蟻が喧嘩して居る
以聞分る程の耳の聰人なり又楊朱字は子居と墨翟とは能辯高

談の人なり并に孔子も天性に稟て是の如く仁義聰明俊辨なり
是を長者といふ又この人々に及ばぬ多くの人は短者といふべし然れど
も皆是生質天然と是の如くかまは彼が長せる所は短者のかなく尽べ
きに非ず真似は爲らまぬ所なり是の如き人も是を以て餘つとありとい
爲ど必ず足ざることを多きものなり又離婁師曠楊朱墨翟の如き長
ぜる人の脚下へも及ばぬ短者にて愚昧短才なる者も己を足ざると爲ど
譬鳧の脛は短しと雖ども是を續足ときは憂ひ難義なるべし鶴の
脛は至て長けれども是を斷切は大に悲しき憂ひなり故に天然の性は
長くとも斷切るべからず自然の性は短しとても續足べからず本來の性に
任せば則は長きも短きも自然なりと觀念すれば憂ひ悲む事なきなり